



不適切な感情

非実在都職員 × 非実在オタク少年

不適切な感情

デスクの上には、大量のコミックスが積み上げられている。どれも異様に目が大きく、頭身が低くて頭でっかちな、いわゆる“萌え系”の絵柄のコミックスだ。

そうでないものも混じってはいるが、そちらは少女マンガのような絵柄で、男同士がイチャイチャとしているようなテイストのものばかり。

コミックスの山の向こうには、有害の棚と健全の棚があり、ここにあるコミックスをすべて、どちらかに振り分けなければならない。

何もクリスマスにこんなものと一緒に過ごさなくてもいいだろうに……と、溝呂木は思い切りため息を漏らした。

「いやー、今月もすごいですよねえ。この中から特に有害なものを見つけろって、もう面倒だし全部有害でいいと思うんですけど」

それを聞いて、隣の同僚が明るく言う。

「まったくだ」

いちいち、すべて確認するのも面倒だ。だが職務を放棄することなど、できるはずもない。審議会にかけるために、不健全図書候補を選定するのが、都職員である溝呂木の仕事なのだ。

溝呂木は大きくうなずきながら、デスクに向かい、一番上にあった1冊を手にとった。

「……なんだ、これは」

ぱらぱらとめくっているうちに、思わず声に出してつぶやいてしまう。

その本はどうやら主人公が女の子のようなのだが、なぜかエッチシーンになると生えているのだ。

……オカマが主人公なんだろうか？ それにしては、主人公が若すぎるような気もする。制服も着ているし、どう見ても高校生くらいに見える。

「あー、それ。最近、流行してるらしいですよー。男の娘っていうらしくて」

「オトコノコ……？」

最近の男の子は女装もするものなんだろうか。溝呂木にはまったくわけがわからない。

だがとりあえず、触手に絡まれていていやらしいような気がするし、汁気も多いし、不健全でいいだろうということで、不健全の棚に置いた。

「何がいいんでしょうねえ？ いくら可愛くても男ですよ、男！」

「あ、ああ……そうだな」

可愛くても男、という言葉にふと、先日のことを思い出す。

溝呂木は口元を抑えながら、別の本を手にとった。

その本はいわゆるボーイズラブ本で、詰襟姿の学生が教室でいたしているような内容だ。

机に押し倒され、下半身を剥かれる少年の姿に、またも鮮明に先日の光景がよみがえってくる。

安ホテルのベッドに押し倒され、はじめは嫌がっていたというのに、だんだんに自分から求めてきた彼——目の前のコミックスに描かれているように、彼の身体もずいぶんと細く、しなやかだったと思います。

薄く筋肉のついた、ほどよい弾力のある若い男の肌だった。

「う……」

溝呂木は思わず、前かがみになった。

他の本を見ていたならまだしも、この本を見ていてこれは、正直まずい。色々と疑われてしまいそうだ。

「それ、きついですよねえ。ボーイズラブですっけ？ 俺、もうそれ見るのきついんで、パラ見してエロそうだったら不健全ってことにしちゃってますよ」

そんな溝呂木を見て、同僚はいい方に誤解してくれたらしい。ホッとして、曖昧に笑みを返す。

「そんないい加減な見方は……よくないんじゃないか？」

「ま、そうですけど。でも俺たちの仕事はほら、候補をあげるだけじゃないですか。最終的に決めるのは審議会ですしね。あんまり少ないとサボってると思われるし、多めなくらいでちょうどいいんですよ」

「それは確かにな……」

溝呂木はうなずき、手元の本を不健全の棚に置いた。

次はもう少し普通のを……と思って手に取った本は、劇画調のコミックスだった。萌え系や少女マンガ系ばかりの中でこれは珍しい。

そう思ってページをめくると、中身はかなり陰惨な内容だった。

誘拐された女子高生が、拷問にかけられて死んでいく話だ。

「……これは有害だな」

「そんなにすごいのですかー？」

「ああ。女子高生が拷問にかけられて、殺されている」

「そんなのまだあったんですね……って、その人かあ。有名ですよ。何度も有害図書に指定されてるのに、ホント懲りないなあ」

「そんなに有名なのか？」

「ええ、そりゃもう。実際にあった事件を題材にしてみたり、もうやりたい放題ですよ。何がよくてこんなもの描くんだかわかりませんがね」

「まったくだ」

本を閉じ、有害の棚に置く。

「こういうのがあるから、真似しちゃうヤツも出てくるんですかねえ」

「マンガだと、詳しく描かれるからな……」

だから、彼もああやって——組み敷かれながら、次第に乗り気になっていったのだろうか？

これまで溝呂木が不健全図書の候補としてあげてきたものの中には、そういったマンガも数多くあった。

最初のうちは嫌がっているのに、だんだん喜び始めたり、最終的にはレイプを肯定して相手と付き合い始めたりするのだ。

「どうしたんです？」

「……あ、いや」

ぼんやりしているのに気付かれ、声をかけられる。

溝呂木は慌てて首を振り、ごまかすように別の本を手にとった。

今度のものはいわゆる凌辱もので、複数の男にレイプされながらも次第に感じ始める——という、ひどく犯罪的な内容だ。

「なあ……ちょっと、いいか？」

「なんです？」

「こういうマンガだと、レイプされて喜んだりしているだろう？」

「ああ、そうですねえ。テンプレですよ、そういうの」

「……そうなのか？」

「そうみたいですよー。ほら、AVとかでもそうじゃないですか。最初は嫌がってたけど、だんだん……みたいな。男の夢って言うんですかね？」

「まあそれは……夢、ではあるな」

「でしょう？」

「だが、それはあくまで夢だと思うんだが」

「そりゃそうですよ。実際にレイプなんかしたら嫌がられるに決まっていますって」

「もし……途中で相手が乗り気になるとしたら、どういうことだと思う？」

「え、そうだなあ……。うーん、あれじゃないですか？ 相手に惚れちゃってるとか」

「……惚れちゃってる」

それはないな、と正直、思う。

何しろ彼は、溝呂木を襲撃してきたくらいだ。危害を加えるつもりはあっても、恋愛感情は抱いていないだろう。

「それ以外のケースはあると思うか？」

「えー、なんですか？ もしかして溝呂木さん、レイプでもしました？」

「ば……、馬鹿、そんなことするはずないだろう！」

思わず大きな声が出る。

「……」

同僚が驚いたような顔で、溝呂木を見つめている。

「……すまない」

「や、いいですけど……こっちこそ、すいません。たちの悪い冗談でしたよね」

溝呂木は首を振って、同僚から視線をそらした。

これ以上、話を続けたら、ボロを出してしまいそうで……。

手元の本をパラパラとめくり、ありえないくらいの激しい喘ぎ声や、ものすごい効果音や、どこから出てくるのか疑問に思うような量の体液をに顔をしかめながら、溝呂木はふと、これまでに読んだ有害図書の数を思い浮かべてみる。

あんなふうに、彼を組み敷いてしまったのも、こういう有害図書の影響なんだろうか？

あのとき——奪い取ったバットを振り上げた自分を、怯えた眼差しで見つめる彼に、身体の芯が疼いてしまったのは。

もっと怯えさせて、怖がらせて、その上で痛いくらいに甘やかしてみたいと思ったのは——もとの溝呂木ではなくて、有害図書を見過ぎたせいで、どこかおかしくなった溝呂木だったのではないだろうか。

少なくとも、世間一般の人間よりもよほど多くの有害図書を目にしている自信がある。チェックをするのだから、読むのは当たり前のことだ。

だから、ああして無理に身体をつなげた後にも、彼のことを思い出してしまうのかもしれない。

あの、わずかに汗ばんだ肌の感触や、普段は皮に覆い隠されている部分の、若い雄の匂いがありありと思い出されるのは、有害図書に毒されているせいなのかもしれない。

「……そうじゃないなら、不適切にもほどがある」

「何が不適切なんですか？」

「あ……いや」

溝呂木は口を閉じ、首を振る。どうやら声に出ていたらしい。

同僚は不審に思っているのか、きょとんとした顔で溝呂木を見つめている。

「また随分ととんでもない、不適切な本だと思ってな」

ごまかすように、手の中の本を振って見せる。

ページを少し見ただけで、ひどい凌辱マンガであることはわかるはずだ。

「ああ、まったくですねえ」

うまくごまかされてくれたらしく、同僚がうなずく。

溝呂木は内心、冷や汗をかきながら、コミックスを有害の棚に置いた。

これもすべて、有害図書のせいだ。

ふとした瞬間に彼を思い出し、また会えるのだろうかなどと、ありえないことを考えてしまうのも——ありえないことだらけの、有害図書を読み過ぎているからに違いない。

「……ペースを上げないと、終わらないな」

溝呂木はことさら、はっきりとした口調で言う。

「ですよねえ。さっさと終わらせて、キャバクラでも行きましょよ～男2人のクリスマスとか寂しいですし！」

「クリスマスにキャバクラも寂しいんじゃないか？」

「あっひどいじゃないですか！？ 大丈夫ですって！ クリスマスは女の子も暇なんで、サービスいいんですよ！？」

「……そういうものか」

どうやら、かなり行きつけているらしい。

あまりそういった場所に入出入りする習慣はないが、今日は付き合うのもいいかもしれない。

若い女との中身の無い会話は、かえって頭を空にしてくれるかもしれない。

ふとした瞬間に思い出す、あの肌の感触と、涙を浮かべた幼い眼差しを、少しは忘れられるのかもしれない。

「よしっ、そうと決まったら頑張らましょ！ 席とっといてくれるように彩花ちゃんに連絡しなくっちゃ」

にわかには盛り上がる同僚に苦笑しながら、溝呂木は新たなコミックスを手にとった。